

# 散柳窓夕栄

永井荷風

青空文庫



## 一

てんぼう 天保十三壬寅の年の六月も半を過ぎた。いつもならば江戸御府内を湧立ち返らせ  
 さんのうだいごんげん 山王大権現の御祭礼さえ今年は諸事御儉約の御触によってまるで火の消えたように  
 さび 淋しく済んでしまうと、それなり世間は一入ひっそり盛夏の炎暑に静まり返つた或日の  
 暮近くである。『修紫田舎源氏』の版元通油町の地本問屋鶴屋の主人喜右衛  
 もん 門は先ほどから汐留の河岸通に行燈を掛ならべた唯ある船宿の二階に柳下亭  
 ねかず 種員と名乗つた種彦門下の若い戯作者と二人ぎり、互に顔を見合わせたまま団扇も  
 いくたび 使わず幾度となく同じような事のみ繰返していた。

「種員さん、もうやがて六ツだろうが先生はどうなされた事だろうの。」

「別に仔細はなからうとは思いますがそう申せば大分お帰りがお遅いようだ。事によつたらお屋敷で御酒でも召上つてゐるのでは御ざいますまいか。」

「何さまこれア大きにそうかも知れぬ。先生と遠山様とは堺町あたりではその昔随分御昵懇であつたとかいう事だから、その時分のお話にいろいろ花が咲いているのかも

知れませぬ。」

「遠山様という方は思えば不思議な御出世をなすつたものさね。ついこの間までは人のいやがる遊あそび人にんとまで身を持崩もちくずしていなすつたのが暫くの中に御本丸の御勘定方におなりなさるなんて、これまで御番衆の方々ごばんしゅう かたがたからいくらかも出世をなすつた方はあるけれど遠山様のような話がありますまい。」

「どうかまア遠山さまの御威光で先生の御身の上に別条のないようにしたいもんさ。万一の事でもあろうものなら、手前なんぞは先生とはちがつて虫けら同然の素町人故すちやうにんゆえ、事によつたら遠島えんとうかまず軽いところで欠所けつしよは免れまい。」

「もし鶴屋さん、縁起えんぎでもねえ。そんな薄気味の悪い話はきつい禁句だ。そんな事をいいなさると何だかいても立つてもいられないような気がします。ぼんやりここで氣ばかり揉もんでいても始まらぬから私はその辺へんまでちよつと一ツ走り御様子を見て参りましょう。」

種員しゅぎんは棧留さんとめの一つ提ひとを腰に下げて席を立ちかけたが、その時女中に案内されて梯子はしご段だんを上あがつて来たのは、何処どこぞ問屋の旦那衆かとも思われるような品の好い四十あまりの男であつた。越後上布えちごじょうふの帷子かたびらの上に重ねた紗しゃの羽織にまで草書そうしょに崩した年の字をば丸く宝珠ほうじゆの玉のようにした紋をつけているので言わずと歌川派うたがわはの浮世絵師うきえし五渡亭国ごとていくにき

貞とは知られた。鶴屋はびっくりして、

「これはこれは亀井戸かめいどの師匠。どうして手前共がここにいるのを御存じで御ざりました。」

「実は今日さる処まで暑中見舞に出掛けたところ途中でお店の若衆わかいしゅうに行き逢い堀田原ほりたわらの先生が日蔭町ひかげちようのお屋敷へしかじかのお話を聞き、私も早速先生の御返事が聞き

たさに急いでやって来ましたのさ。時に先生はまだ遠山様のお屋敷からはお帰りがないと見えますな。」

国貞は歩いて来た暑さに頻しきりと団扇うちわを使い初める。立ちかけた種員は再び腰なる煙草たばこ入いれを取りしながら、「五渡亭先生も御存じで御座いましょう。手前と相弟子あいでしの彼の笠亭ありゆうていせ

仙果んかがお供を致しまして御屋敷へ上つておりますから、私は今の中一うちひとはし走り御様子を見て参ろうかと思つていた処で御座ります。もう追付おっつけお帰りとは存じますが何となく気がかりでなりませぬ。」

「いかにも不斷ふだんから師匠思ひのお前さん故さぞ御心配の事だろうと重々じゆうじゆうお察し申します。私わしなぞは申さば柳亭翁とは一身体。今日此頃このころでは五渡亭国貞といえは世間へも少しは顔の売れた浮世絵師。それというも実を申せば『田舎源氏』の絵をかき出してからの事ゆえ、万が一お咎めとがの筋でもあるようなら私わしは所詮しよせん逃れぬ処だと、とうから覚悟はき

めていますが、お互にどうかまアそんな事にはなりたくないもの。」と国貞は声を沈まして、忘れもせぬ文化三年の春の頃、その師歌川豊国が『絵本太閤記』の挿絵の事よりして喜多川歌麿と同じく入牢に及ぼうとした当時の恐しいはなしをし出した。すると鶴屋の主人もついついその話につり込まれて六、七年前に大酒で身を損ねた先代の親爺から度々聞かされた話だといって、これは寛政御改革のみぎり山東庵京伝が黄表紙御法度の御触を破つたため五十日の手鎖、版元蔦屋は身代半減という憂目を見た事なぞ、やがて談話はそれからそれへと移つて遂には英一蝶が八丈島へ流された元禄の昔にまで溯つてしまつたが、これは五渡亭国貞が先頃から英一蝶に私淑してその号まで香蝶楼と呼んでいたがためであつた。折から耳元近く轟々と響きだす増上寺の鐘の聲。門人種員はいよいよ種彦の様子を見に行こうと立上り大分山の痛んでゐるらしい帯の結目を後手に引締めながら簾を下した二階の欄干から先ず外を眺めた。日の長い盛りの六月の事とて空はまだ昼間のままに明るく青々と晴渡つていた。いつもならば向河岸の屋根を越して森田座の幟が見えるのであるが、時節がらとて船宿の棧橋には屋根船空しく繋がれ芝居茶屋の二階には三味線の音も絶えて彼方なる御浜御殿の森に群れ騒ぐ鳥の声が耳立つばかりである。夕日は丁度汐留橋の半ほどから堀割を越し

中津侯のお長屋の壁一面に烈しく照り渡っていたが、しかし夕方の涼風は見えざる海の方から、狭い堀割へと渦巻くように差込んで来る上汐の流れに乗じて、或時は道の砂をも吹上げはせぬかと思うほどつよく欄干の簾を動し始める。

国貞と鶴屋の主人は共に風通しのいいこの欄干の方へとその席を移しかけた時、外を見ていた種員が突然飛上って、「皆さん、先生がお帰りで御座ります。」

「なに先生がお帰り。」

いう間もおそし、一同はわれ遅れじと梯子段を駆け下りて店先まで走り出ると、差翳す半開きの扇子に夕日をよけつつ静に船宿の店障子へと歩み寄る一人の侍。これぞ当流行の草双紙『田舎源氏』の作者として誰知らぬものなき柳亭種彦翁であった。細身造りの大小、羽織袴の盛装に、意気な何時もの着流しよりもぐっと丈の高く見える瘦立ちの身体は危いまでに前の方に屈まっていた。早や真白になった鬢の毛と共に細面の長い顔には傷しいまで深い皺がきざまれていたけれど、しかし日頃の綺麗好に身じまいを怠らぬ皮膚の色はいかにも滑かにつやつやして、生来の美しい目鼻立の何処やらにはさすがに若い頃の美貌のほども窺い知られるのであった。

種彦は今日しも老体の身に六月大暑の日中をもちとわず、予てより御目通りを願って

置いた芝日蔭町なる遠山左衛門尉様の御屋敷へと人知れず罷り越したのである。  
仔細しさいというは外ほかでもない。去頃さるころより御老中水野越前守様寛政御改革の御趣意を  
そのままに天下奢侈しやしの悪弊を矯正きようせいすべき有難き思召おもしめしにより遍く江戸町々へ御触おふれが  
あつてから、已すでに葺屋町堀町の両芝居は浅草山の宿の辺鄙へとお取払いになり、  
また役者市川海老蔵いちかわえびぞうは身分不相応の贅沢ぜいたくを極めたる廉かどによつてこの春より御吟味にな  
つた。それやこれやの事から世間では誰いうともなく好色本草双紙類の作者の中でも  
とりわけ『修紫田舎源氏』の作者柳亭種彦は光源氏の昔に譬たとえて畏多おそれおほくも大御所様  
大奥の秘事を漏もらしたにより必ず厳しい御咎おとがめになるであらうとの噂うわさが頗る喧しいのであつ  
た。種彦はわが身の上は勿論もちろんもしやそのために罪もない絵師や版元にまで禍わざわいを及ぼして  
はと一方ひとかたならず心配して、こうなるからは誰ぞ公辺こうへんの知人しりびとを頼り内々事情を聞く  
に如くはないと兼て芝居町なぞでは殊の外懇意にした遠山金四郎という旗本の放蕩ほうとう  
児が、いつか家督をついで左衛門尉景元さえものじようかげもとと名乗り、今では御本丸へ出仕するような  
身分になつているのを幸い、是非にもと紐付すがりついて極内ごくない々に面会を請うた次第であつた。  
「先生、早速で御座います。が御屋敷の御首尾はいかがで御座りました。」

一同は一先種彦を二階へ案内するや否や、茶を持運ぶ女中の立去るをおそしと、左右

から不安な顔を差伸さしのばすのであった。種彦は脇差を傍に扇を使いながら少し身をくつろがせ、

「いや、もうさして御心配なさるにも及ぶまい。遠山殿の仰せには町方まちかたの事とは少々御役向やくむきが違ちがう故ゆえ、あの方かたの御一存ごいちぞんでは慥しかとした事は申されぬが、何につけお上かみにおいて御仁恵ごじんけいが第一。それにとりわけこの度の御趣意たびと申すは上下こうぞ挙あつて諸事御儉約を心掛けいという思おぼしめし召故めし、それぞれ家業に精を出し贅ぜいたく沢たくなことさえ致さずば、さして厳しい御詮議ごせんぎにも及ぶまいとの仰せおほ。それだによつてこの際はお互によく気をつけ精々間違のないように慎んでおるがよろう……。」

「さようで御ざりましたか。それでは別に差当あつて御叱おしかりを蒙こうむるような事はなかうと仰お有つしやるんで御座いますな。いや、先生、その御言葉を聞きまして手前はもう生き返つたような心持になりました。」

版元鶴屋は襟元えりもとの汗をばそつと手拭てぬぐいで押拭おしうと、国貞も覚えすほつと大きな吐息といきを漏もして、

「手前も御同様、やつとこれで安堵致あんどしました。何事によらず根もない世上の噂というやつほどいまいましいものは御座りません。初手しよてからこうと知つていればこんなに瘦やせるほ

ど心配は致しません。」

「全く亀井戸の師匠の仰有る通りさ。手前なんざアそれがためあれからというものは夜もおちおち睡眠ふせりません。」と鶴屋の主人あるじは全く生返ったように元氣づき、「先生、それではもうそろそろお船の方へお移りを願いましうか。お帰りは丁度夕涼ゆうすずみの刻限かと存じまして先ほど木挽町こびきちようの酔月すいげつへつまらぬものを命じて置きました。」

「それはそれは。いつもながら鶴屋さんの御心遣おこころづかいには恐縮千万。」

「お言葉ではかえって痛み入ります。実はまだいろいろと御話を承りたいことが御座ります。丁度今日は亀井戸の師匠もおいでで御座りますし、さしずめ唯今板木はんぎに取りかかっております『田舎源氏』の三十九篇、あれはいかが致したもので御座りましょうか、いずれ船中で御ゆるり御相談致したいと存じております。」

一同は種彦を先に棧橋さんばしにつないだ屋根船に乗込んだ。

## 二

背中一面に一人は菊慈童きくじどう、一人は般若はんにやの面の刺青ほりものをした船頭もやいが纜いを解くと共にと

んと一突棧橋から舳を突放すと、一同を乗せた屋根船は丁度今が盛の上汐に送られ、滑るがように心持よく三十間堀の堀割をつたわつて、夕風の空高く竹間屋の青竹の簀立つてゐる竹河岸を左手に眺め真直な八丁堀の川筋をば永代さして進んで行つた。

夏の日はいに沈んで、空一面の夕焼は堀割の兩岸に立並んだ土蔵の白壁をも一樣に薄赤く染めなしていると、その倒なる家の影は更に美しく満潮の澄渡った川水の中に漂い動いている。幾個と知れぬ町中の橋々には夕涼の人の団扇と共に浴衣一枚の軽い女の裾が、上汐のために殊更水面の高くなつた橋の下を潜行く舟の中から見上る時、一入心憎く川風に翻つてゐるのである。

一同は種彦の語つた最前の話に百年の憂苦を一朝にして忘れ得た思い。酔月から取寄せた料理の重詰を開き川水に杯を洗いながら、頻に絶景々と叫んでいたが、肝腎な種彦一人は大暑の日中を歩みつづけた老体につかれを覺えた故か、何となく言葉少く、片脰を舐に背を胴の間の横木に寄せかけたまま、簾越しに唯ぼんやり遠い川筋の景色にのみ目を移していた。

しかし船中の一人がふと種彦の様子を怪しんで、何処ぞ御気分でもと氣を揉むものがあ

れば、種彦は忽ちわざとらしいまでに元氣よく、杯を見事に呑干して、「いや、どうも年ばかりは取りたくないものさ。少し遠路でもいたすと直ぐにこの通りの始末で御座る。」といつにも変らぬ軽い調子で、「しかししまわれらお互の身に取って今日ほど目出たい日はあるまいて。鶴屋さんが折角のお饗応だ。種員も仙果も遠慮なく頂戴致すがよいぞ。」といいながら、しかしどういふ訳か一同の如く心の底から陶然と酔を催す様子は更に見えなかつた。

種彦は先刻から遠山左衛門尉が事をばいかほど思うまいと力めて見てもどうしても思返さずにはいられなかつたのである。顧れば十幾年前芝居町などで能く見た折の金四郎と今日の左衛門尉とを思い比べると実に不思議な心持になる。遠山は辞を低うしてその邸に伺候した種彦を喜び迎え、昔に変らぬ剩談ばなしの中にそれとつかず泰平の世は既に過ぎ恐しい黒船は蝦夷松前あたりを騒がしている折から、世は上下とも積年の余弊に苦しみつかれてゐる様を見ては、われ人共に公禄を食むもの及ばずながらそれぞれひとかど一廉の忠義を尽さねばなるまいと、衷心から湧起る武士の赤誠を仄見せて語つたその態度その風采。種彦はどういふ機会かわが身の今日と彼れ遠山の今日とを思比べて、当世の旗本風情にもまだまだあんな立派な考えを持つてゐるものがあるのか知らと思

うと、そもそも我から意識して戯作者となりすました現在の身の上がいかにも不安にまた何とも知れず気恥しいような気がしてならなくなった。しかしいかほど深い感慨に沈められても種彦は今更それをば船中のものに向つて語り聞かせる訳には行かぬ。よし話すにしてもこの場合思ふように打明けて語り得られるものではない。さされた酒杯をばさされるままに呑み干しては返し、話掛けられる話を、心もよそに唯受答えをするばかり。船はいつしか狭い堀割の間から御船手屋敷の石垣下を廻つてひろびろとした佃の河口へ出た。

一同は既に十分の酔心地。覚えず声を揃えてまたもや絶景々と叫ぶ。夕焼の空は次第に薄らぎ鉄砲洲の岸边に碇を下した親船の林なす帆柱の上にはちらちらと星が飛び出した。佃島では例年の通り狼烟の稽古の始まる頃とて、夕涼かたがたそれをば見物に出掛ける屋根船猪牙舟は秋の木葉の散る如く河面に漂っていると、夕風と夕汐のこの刻限を計つて千石積の大船はまた幾艘となく沖の方から波を蹴つてこの港口へと進んで来る。その大きな高い白帆のかげに折々眺望を遮られる深川の岸边には、思切つて海の方へ突出して建てた大新地小新地の楼閣に早くも燦き初める燈火の光と湧起る絃歌の声。すると櫓の齒のように並連つたそれらの栈橋へと二挺艦いそがしく輻湊

する屋根船猪牙舟からは風の工合で、どうかすると手に取るように藤八拳とうはちけんを打つ声が聞えて来る。

国貞は近頃一枚絵にと描いてやつた深川の美女が噂うわさをしはじめると鶴屋の主人あるじはまた彼の地を材料にした為永春水ためながしゆんすいが近作の売行うれゆきを評判する。その間まもあらず一同を載せた屋根船は殊更に流れの強い河口の潮に送られて、夕靄ゆうもやの中に横る永代橋うちよこたわえたいばしを潜るが早い、三股みつまたは高尾稻荷たかおいなりの鳥居かなたを彼方に見捨て、曉方あかつきがたの雲の帯なくかなかずの時鳥ほととぎすと、蜀山人しよくさんじんが吟咏ぎんえいのめりやすにそぞろ天明てんめいの昔をしのぼせる仮宅かりたくの繁昌はんじやうも、今は唯ただだ蘆あしのみ茂る中洲なかすを過ぎ、気味悪く人を呼ぶ船饅頭ふなまんじゅうの声を嚙ねぐら定めぬ水禽みずとりの鳴な音くねかと怪しみつつ新大橋しんおおはしをも後にすると、さて一同の目の前には天下の浮世絵師が幾人よつて幾度いくたび丹青たんせいを凝しても到底描き尽されぬ両国橋りやうごくばしの夜の景色が現いづわれ出るのであつた。

去年に比べると今年は御倂約おふれの御触おふれが出てから間もないためか、川一丸かわいちまるとか吉野丸よしのまるとかいう提灯ちようちんを下つらげ連ねた大きな大きな屋形船に美女と美酒とを満載して、吹けよ河風上すだれれよ簾さんさの三下のりに吞めや唄うたえの豪遊を競うものは稀まれであつたが、その代り小舷こへりに繻し子の空解そらどけも締めぬが無理かと簾下おろした低唱ていしやう浅酌せんしやくの小舟こぶねはかえつていつにも増して

多いように思われた。両国橋の橋間は勿論料理屋の立並ぶあたり一帯の河面はさすがだいが、こみあの大河も込合う舟に蔽尽され、流るる水は舳から玉臂を伸べて杯を洗う美人の酒に湧いて同じく酒となるかと疑われる。

鶴屋の主人は「先生。」とよびかけて、「いつ見ましても御府内の御繁昌は豪勢なもので御座いますな。いかがで御座いましょう。どこぞその辺の棧橋へ着けまして二、三人綺麗などころを呼寄せ久ぶりで先生の美音を拝聴いたしたいもので御座ります。」

「これはとんでもない。こう年を取っては色気よりも喰気と申したいが、この頃ではその喰気さえとんと衰え、いやはや、もうお話にはなりません。折角の御酒も御覧の通り二、三杯いただと唯うとうとと眠気を催すばかりさ。さすが蜀山先生はうまい事を書いていますよ。先達さる人から『奴師勞之』と申す随筆を借りて見ましたがな……。」

と種彦は先ほどから舳に舳をつき船のゆれるがままに全く居眠りでもしていたらしく、やや坐住居を直して、今更のように四辺の賑いを打見遣りながら、どうかすると、摺交う舟の唄または岸の上なる見世物小屋の騒ぎにも打消されるほどな静な声で、蜀山人が随筆『奴師勞之』の終りに、老病ほど見たくでもなくいまいましきものはなし……酒のみても腹ふくるるのみにて微醺に至らず物事にうみ退屈し面白からず。声色の楽しみもなくな

だ寝るをもて楽みとす。奇書も見るにたらず珍事もきくにあきぬ。若き時酒のみてとろろ眠りし心地と狎れたる妓のもとに通いし樂は世をへだてたるごとくなりきと書いた文章の事をしめじみと語り出して、その終に添えた狂歌一首、「ながらへば寅卯辰巳やしのぼれん、うしとみし年今はこひしき。」それをばあたかも我が身の上を詠じたもののように幾度か繰返して聞かせるのであった。屋根船はその間にいつか両国の賑を漕ぎ過ぎて川面のやや薄暗い御蔵の水門外に差掛つていたのである。燈火の光に代つて蒼々とした夏の夜の空には半輪の月。行手の岸には墨絵の如くにじんだ首尾の松。国貞は猪口を手にしたまま、

「唐崎の松は花よりおぼろにて。」と感に堪えたる如く呟いた。

「御府内には随分名高い松の木があるようで御座いますがやはりあの首尾の松に留めを刺しますかな。」と答えたのは鶴屋喜右衛門である。

「さよう、小名木川の五本松は芭蕉翁が川上とこの川しもや月の友、と吟じられたほどの絶景ゆえ先ず兄たりがたく弟たりがたき名木でしょう。それから根岸の御行の松、亀井戸の御腰掛の松、麻布には一本松、八景坂にも鎧掛の松とか申すのがあります。」と国貞は鶴屋の主人と差向つて頻に杯を取交していた時、行き交う一艘の

屋根船の中から、

「月あかり見ればおぼろの舟の内、あだな二上り爪弾きに忍び逢うたる首尾の松。」と心  
 悪 いばかり、目前の実景をそのまま中音の美声に謡い過ぎるものがあつた。

先ほどから舳へ出て、やや呑み過ぎした酔心地を得もいわれぬ川風に吹払わせていた  
 二人の門人種員と仙果は覚えす羨望の眼を見張つて、過ぎ行く舟の奥床しくも垂込  
 めた簾の内をば窺見ようと首を伸したが、かの屋根船は早くも遠く川下の方へと流れ  
 て行つてしまつた。しかしいよいよ首尾の松が水の上にと長くその枝を伸しているあたり  
 まで来ると、川面の薄暗さを幸に彼方にも此方にも流れのままに漂してある屋根船の数々、  
 その間をば一同を載せた舟が小舷に漣を立てつつ通抜けて行く時、中にはあわてふため  
 いて障子の隙間をば閉切るものさえあつた。どの船からという事もなく幽暗なる半月の  
 光に漂い聞ゆる男女が私語の声は、折々向河岸なる椎の木屋敷の塀外から幽かに夜  
 駕籠の掛声を吹送つて来る川風に得もいわれぬ匂袋の香を伴わせ、また途切がちな爪  
 弾の小唄は見えざる河心の水底深くざぶりと打込む夜網の音に遮られると、嚴重な  
 御蔵の構内に響き渡る夜廻りの拍子木が夏とはいいなながら夜も早や初更に近い露の冷さ  
 に、何とも知れず人肌恋しき秋の夜の風情を覚えさせるのであつた。

余りに艶しい<sup>なまめか</sup>辺りの情景に、若い門人たちは自ら誘い出される淫蕩な空想にもつかれ果てたのか、今は唯<sup>やるせ</sup>遺瀨なげに腕を組んで首を垂れてしまった。国貞が鶴屋の主人を相手に傾ける酒も早や尽きたらしい。御厩河岸の渡を越して彼方に横わる大川橋の橋間からは、遠い水上に散乱する夜釣の船の篝火さえ数えられるほどになると、並木の茶屋の賑と町を歩く新内の流しが聞えて駒形堂の白い壁が月の光に蒼く見え出した。

## 三

一同は禁殺碑の立っている御堂の裏手から岸に上った。

国貞は爰から大川橋へ廻つて亀井戸の住居まで駕籠を雇い、また鶴屋は両国橋まで船を漕ぎ戻して通油町の店へ帰る事にした。種彦は遠くもあらぬ堀田原の住居まで、是非にもお供せねばという門人たちの深切をも無理に断り、夜涼の茶屋々々賑う並木の大通を横断つて、唯一人薄暗い町家つづきの小道をば三島門前の方へとぼとぼ老体の歩を運ばせたのである。

種彦は先ほどから是非にも人を遠ざけ唯一人になって深く己が身の上を考えて見ねばな

らぬ。この年までいわば何の気もなく暮して来たその長い生涯を回顧して見べき必要に迫められていたのであった。昔は自分なぞよりはもう一層性の悪い無頼漢のようにも思っていた遠山金四郎とおやまさんしろうが今は公儀の重い御役おやくを勤め真実世の有様を嘆き憂うれひているかと思えば、種彦とこは床まの間に先祖の鎧よろいを飾った遠山が書院に對座して話うちをしている間から何時いつとなく苦しいような切ないような氣恥しいような何ともいえない心持になったのである。一体どうしてそういう妙な心持になったのであろう。まずその原因おこりから考えて見なければならぬ。武士の家に生れたその身は子供の時から耳に胼胝たこのできるほどいい聞かされた武士の心得武士の道。しかしそんなものはこの歳とし月唯「お輕勘平」のような狂言戯作げきやくの筋すじだて立にのみ必要なものとしていたのではないか。それが今どうして突然意外にも不思議にも心を騒がし始めたのであろう。思返えせば二十歳の頃ふと芝居帰がえりの或夜野暮な屋敷の大むれ小の重きを覚え、御奉公の束縛げみんなき下民の氣樂うれやを羨みいつとしもなく身をその群に投じてここに早くも幾十年。今日しも遠山の屋敷の玄關に音ずれるその日までは夢にさえ見るところを忘れていた武家の住居すまい——寒氣なほどにも質素に悲しきまでも淋さびしい中なかにいうにいわれぬ森しんげん嚴みなぎな氣を漲らした玄關先から座敷の有様。またその道すがら横手遙はるかに幸橋さいわいばしの見附みつけを眺めやつた御郭外おくるわそとの偉大なる夕暮の光景が、突然の珍らしさにふと少年時代の良

心の残骸ざんがいを呼覚よびさしたというより外ほかはあるまい。

しかし種彦いまさこは今更いまさらにどうとも仕様のないこの煩悶はんもんをば強しいても狂歌や川柳せんりゆうのよ  
うに茶化ねえしてしまおうと思いながら、歩いて行く町のとどこどに床しょうぎ几ぎを出しした麦湯むぎゆ  
の姐ねえさんたちの厭いやらしい風俗。それに戯あそれる若者の様子を目撃しては、以前のようにこれ  
も彼の式亭三馬しきていさんばが筆のすさみのそのままだと笑つてばかりはいられないような氣になる  
のであつた。我が家に近い桃林寺とうりんじの裏手では酒買さかいに行く小坊主の大胆に驚おどき、大岡  
殿どのの屏外の暗さには夜鷹よたかに挑いどむ仲間ちゅうげんの群むれに思おもわずも眼そを外向むけつつ、種彦ようやは漸おほくそ  
の家の門いえかどにたどりついた。

直様すぐさま家内かのものをも遠かきざけ、書かきものをするからとて、二階ふたまいの一ひと間に閉こもじ籠こもつたが、見  
廻せば八畳の座敷狭しと置並おきならべた本箱ほんばこの中の書しよ籍じやくは勿論もちろん、床とこの飾物けしものから屏風びやうぶの絵  
に至るまで、凡すべて修にせ紫むらさき楼きうろうと自ら題だいしたこの住居すまいのありさまは、自分おのれが生なれた質素しつそな  
下谷御徒町したやおかちまちの組屋敷くみやしきに比べてそも何なんといおうか。身に帯おビびるそれも極ごく軽かろい細身ほそみの大  
小ほかより外ほかには物の役に立つべき武器ぶきとては一ツもなく、日頃身みに代かえてもと秘藏ひざうするの  
古今ここんの淫書いんしよ、稗史はいし、小説せうせつ、過ぎし世よの婦女子かんぐの玩具がんぐにあらずんば傾城遊女けいせいゆうじよが手道具  
の類たぐいばかり。ああ思おもえば唯ただうらうらと晴渡はるる春はるの日のよような文化文政ぶんわぶんせいの泰平たいへいに沈ちん湎めんして

天下の事は更なり、わが髪かみの白くなるのも打忘れ世よにいう悪所場あくしょばをわが家の如く今日は  
 吉原よしわら明日は芝居と身の上知らず遊び歩いていたその頃には、どういう訳わけか人の道を忘れ  
 た放蕩ほうとう惰弱だじやくなものいの厭いとわしい身の末が入相いりあいの鐘に散る花かとばかり美しく思われて、  
 われとても何時いつか一度は無常の風にさそわれるものならば、今もなお箕輪みのわしん心中しんじゅうと世に  
 歌うたわれる藤枝外記ふじえだげき、また歌比丘尼うたびくにと相对あいたい死じの浮名を流した某家の侍さむらいのように、せめて刹せ  
 那つなうるわの麗はしい夢に身を果してしまつた方がと、折節おりふしに聞く浄瑠璃じようるりの一節ひとふしにも人事ひとことな  
 らぬ暗涙あんなみを催す事が度々であつた。日ごとに剃る月さかづき代もまだその頃には青々として美し  
 く、すらりとして丈高せいく、長い頤おとがに癖おとのある細面ほそおもての優しさは、時の名優坂東三津五郎ばんどうみつごろう  
 を生写いきうつしと到る処いたの茶屋々々にいい囃はやされるが何よりも嬉しく、わが名をさえも三彦みつひこ  
 と書き、いつかは老おいの寢覚ねざめにも忘れがたない思出の夢を辿たどつて年ごとに書綴りては出す戯げ  
 作さくのかずかず。心なき世上の若者淫奔いたずらなる娘の心を誘いざなひ、なおそれにて飽き足らず、  
 是非にも弟子にと頼まれる勘当の息子たちからは師匠と仰がれ世を毒する艶なまめかしい文章の講  
 釈。遊里戯場の益もない故実こじつの詮議せんぎ。今更にそれを悔くやんだとて何としよう。自分を育てた  
 時代の空気は余りに軟く余りに他愛がなさ過ぎたのだ。近頃日光の御山おやまが頻しきりに荒出して、  
 何処どこやらの天領では蛭はたらや蛙かわずの合戦かつせんに不吉の兆ふきつしるしが見えたことや。果せるかな恐ろしい異人

の黒船は津々浦々を脅かすと聞くけれど、ああこの身は今更に何としようもないではないか……。

種彦は書きかけた『田舎源氏』続篇の草稿の上に片肱をついたまま唯茫然として天井を仰ぐばかりである。物優しい燈音が梯子段に聞えた。そして葭簀越しにも軽く匂わせる仙女香の薫と共に、髪は下り髷の糸巻くずし、銀胸の黄楊の櫛をさし、団十郎縞の中に丁子車を入れた中形の浴衣も涼しげに、小柳の縞の帯しどけなく引掛にしめた女の姿、年の頃はまだ二十ばかりと思われた。

「お園か。」とやさしく種彦は机の上に肱をついたまま此方を顧み、「おツつけもう子刻だろうに階下ではまだ寝ぬのかえ。」

「はい。ただ今御新造様ももうお休みになるからと表の戸閉りをなすつていらつしやいます。」と女は漆塗の蓋をした大きな湯呑と象牙の箸を添えた菓子皿とを種彦の身近に薦めて、前挿の簪の落掛るのをさし直しながら、「お煙草盆のお火はよろしゅう御ざりますか。」

「いや結構だ。何や彼やとよく気をつけてくれるから家のものも大助りだ。お園やお前さんも一ツ摘みなさい。廊にいて贅沢をした御前方には珍しくもあるまいが、この頃は

諸事御儉約の世の中、衣類から食物まで無益な手数をかけたものは一切御禁止というきびしいお触だから、この都鳥の落雁も当分は食納になるかも知れぬ。今の中遠慮なく食べて置くがよいぞ。」

「はい。ありがとう御座ります。先ほど階下で御新造様から沢山頂戴いたしました。時に旦那さま、そう申せばこの頃は何とやら大層世間が騒々しいそうで御座りますが、此方様に私見たようなものがおりまして万一の事でもありましたらと、それがもう心配でなりません。」

「何さ、その事ならちつとも氣を揉むには当らぬ。お前の事は初手からいわば私が酔興でこうして隠つて上げているの故、余計な氣兼ねせずと安心していなさるがいい。」

と種彦は取上げる銀のべの長煙管に烟を吹きつつしみみとお園の様子を打眺め、「それにもうその風俗なら誰が見ようと大丈夫だわ。中形の浴衣に糸巻崩し昼夜帯の引掛け掛という様子なり物言いなり仲町の妓と思う人はあるかも知れぬが、ついぞこの間まで廓にいなすつた華魁衆とはどうして気がつくものか。」

「ほんにそうだと、どんなに嬉しいか知れません。どうか一日も早く堅氣になりたいたものと一生懸命に氣をつけているのでありますが、どうかいたすといひ口の先へそうぎますの

ありんすのと、思わず里なまりの訛なまりが出そうになりました、御新造様とお話をしていまして、それはそれはもう心配でなりません。」

「大きにそうであらう。まア何にしても当分は世を忍ぶ身体からだ。すっかり先方の話がまとまるまでは大事の上にも大事を取るに越した事はない。もう暫しばらくの辛抱しんぼうだによつて滅多めったに外なぞへは出なさらぬがいいぜ。」

「はい。それはもう能くわかつております。」と辞儀をしながらお園はなお何やら傍そばにいて尽きせぬ身の上の話でもしたいような様子であつたが、言葉絶やすと共にそのまま腕を組む種彦の様子に、女は所在なげにその後姿うしろすがたもしょんぼりと再び静かな聲あしおと音を梯子はし下段の下に消してしまった。

#### 四

家うち中なかつはそれなり寂しんとして物音を絶やした。今までは折々門外の小路こうじに聞えた夜遊よあそびの人の鼻唄はなうた、遠くの町を流して行く新内しんないの連弾つれびき、枝豆えだまめ白玉しらたまの呼声こゑなど、いつ深ふけるとも知らぬ町の夜の物音は忽たちまち彼方かなた此方こなたに鳴り出す夜廻りの拍子木に打消される折か

ら、浅草寺の巨鐘あさくさでら きよしようの声はいかにも厳かにまたいかにも穩に寝靜まる大江戸の夜の空おごそ おだやかから空へと響き渡るのであった。すると毎夜種油たねあぶら ついえの費を惜しまず、三筋も四筋も燈とうし心を投入れた修紫楼にせむらさきろう まるあんどうの円行燈は、今こそといわぬばかり独りこの戯作者げさくしゃの庵をわが物顔に、その光はいよいよ鮮かにその影はいよいよ涼しく、唐机とうづくえの上なる書かきか掛の草稿けと多年主人あるじが愛翫あいがんの文房具とを照し出す。

孟宗もうそうの根竹に梅花を彫った筆筒ふでづつの中に乱れさす長い孔雀くじやくの尾は行燈あんどうの火影ほかげに金光燦爛きこうさんらんとして眼を射るばかり。長崎渡りの七宝焼しつぼうやきの水入みずいれは焼付やきつけの絵模様え模様に遠洋えんやう未知の国の不思議を思わせ、赤銅色しゃくどういろえ絵の文鎮ぶんちんは象嵌細工ぞうがんさいくの織巧せんこうを誇れば、傍なかたわらる茄子形なすびがたの硯すずりいし石いしは紫檀したんの蓋ふたの面に刻んだ主人が自作の狂歌、

名人になれく茄子なすと思へども

とにかく下手へたは放れざりけり

という走書はしりがきの文字までをありありと読ませるのであった。

種彦たちまは忽ち今までの恐怖と煩悶はんもんに引替えていかなる危険を冒おかしても、この年月精魂としつきを籠めて書きつづけて来た長い長い物語を、今夜の中うちにも一氣に完成させてしまわなければならぬような心持になるのであった。思返すまでもなく、それは実に寛政かんせいの末つ頃ころ、

ふと己れがまだ にし西丸の御小姓を勤めていた頃の若い美しい世界の思出されるまま、  
その華やかな記憶の夢を物語に作りなして以来、年ごとに売出す合巻の絵草紙の数も  
重つて天保の今日に至るまで早くも十幾年という月日を閲した。その間というものは年  
ごとに咲く花は年ごとに散つて行つても、また年ごとに鬢の毛の白さは年ごとに刻まれる  
額の皺と共に増つて行つても、この修紫楼の深更を照す円行燈のみは十年一日の如くに夜  
としいえば、必ず今見る通りの優しい艶しい光をわが机の上に投掛けてくれたのである。  
種彦は半ば吞掛けた湯呑を下に置くと共に墨摺る暇ももどかし氣に筆を把つたがやがて小  
半時 はんどきもたたぬ中に忽ち うち長 ちようたいそく大息を漏してそのまま筆を投捨ててしまった。そして恐る  
る如くに机から身を遠ざけ、どつさりと床の柱に背を投掛け眼をつぶり手を拱いたかと思  
うと、またもや未練らしく首を延して、此方からしげしげと机の上なる草稿を眺めやるの  
であつた。

突然庭の彼方に当つて風の音とも思われぬ怪しい物音がした。種彦は慄然としてわが  
影にさえ恐れを抱く野犬のように耳を聳てたが、すると物音はそれなり聞えず二階の夜は  
以前の通り柔かな円行燈の光ばかり。けれども種彦が再び草稿の上に眼を注ごうとした時  
今度は何者か窃に忍寄るような蹙音が聞えたので、いよいよ顔の色を失うと共に行燈

の火を吹消すが早い、種彦は一刀を手にして二階の丸窓をば音せぬように押開き庭の方を見下した。半月が斜めに悲し気に丁度隣家の屋根の上に懸っている。晴れた空には早や秋の気が十分に満渡っている。せいか銀河を始め諸有る星の光は落ちかかる半輪の月よりもかえって明るく、石燈籠の火の消残る小庭のすみずみまで隈なく照しているように思われた。犬の吠える声もない。怪し気な人影などは更に見当ろうはずもない。手入を怠らぬ庭の樹木と共に飛石の上に置いた盆栽の植木は涼しい夏の夜の露をばいかにも心地よげに吸っているらしく穏かなその影をば滑らかな苔と土の上に横えていた。軒の風鈴をさえ定かには鳴らし得ぬ微風——河に近い下町の人家の屋根を越して唯緩く大きく流動している夜気のそよぎは、窓から首を差延す種彦が鬢の毛を何ともいえぬほど爽かに軽く吹きなびかせる。種彦はわが身の安危をも一時に忘れ果てたように、暫は唯茫然とこの得もいわれぬ夜の氣に打たれていたが、する中、忽然わが家の縁先から、こは如何に、そつと庭の方へと降立つ幽霊のような白い物の影。

再び刀を杖に半身を屋根の方へ突出してよくよく見れば、消えようとして更に明く頻と瞬きする石燈籠の火影にそれは誰あろう、先ほど湯呑に都鳥の菓子を持添えて来たかのお園ではないか。仔細あつて我家にかくまうそれまでは新吉原佐野槌屋の抱え喜蝶と

名乗つたその女である。おろおろしつつも庭の柴折戸に進すすみよ寄り音せぬように搔金かきがねをはずすと、自ら開く扉の間から物腰のやさし気な男が一人手拭てぬぐいに顔をかくし這わぬばかりに身をかがめて忍び入った。二人は少時しばし立ちすくんだまま互に姿さえ恐るる如く息を凝こらして見合っていたが、やにわに双方から倒れかかるように寄添よりそいぎま、ひしと抱合いだきあつて、そのまま女は男の胸に、男は女の肩の上に顔を押当て唯ただただ声を吞のんで泣沈んだらしい様子である。

種彦は最初一目見るが早い、忍入しのびった彼の男というはほど遠からぬ鳥越とりごえに立派な店を構えた紙問屋の若旦那で、一時己おのれの弟子となつた処から柳絮りゅうじよという俳号をも与えたものである事を知っていた。若旦那柳絮はいつぞや仲の町の茶屋に開かれた河東節かとうふしのお浚さらいから病付やみつきとなつて、三日に上げぬ廓くるわがよ通いの末はお極きまりの勘当かんどうとなり、女の仕送りを受けて、小梅こうめの里の知人しりびとの家にその日を送っている始末。もしやこのまま打捨うちすててて置いたなら心中もしかねまいと、種彦は知己ちかづきの多い廓の事とて適當の人を頼んで身請うけや何かの事は追おつての相談に、一先ひとまず女をわが家やに引取り男の方へは親許の勘当ゆりまで少しの間辛抱して身をつつしむようにといひ含めて置いたのである。然しかるをやつと半月たつたために若い二人はもう辛抱がしきれずに、いつ謀しめし合したのか互たがいに時刻を計つ

て忍逢しのびあおうという。誠に怪けしからぬ事だと種彦は心の中に憤うちろうと思ひながら、自分にも幾度いくたびか覚えのある若い昔を思い返せば、何も彼も無理はない事と訳もなく同情してしまわなければならぬ。それと共にいかに恋ゆえとはいひながらかほどまで義理も身も打捨てて構わぬ若い盛りの無分別うらやほど羨ましいものはないと思うのであった。ああ、あの無分別の半分ほどもあるならば自分は徳川の世の末がいかになり行こうと、あるいは自分の身がいかに処罰されようと、そんな事には頓とん着ちやくせず、自分の書きたいと思うところをどしどし心の行くままに書く事ができたであらう。悲しむべきは何につけても勇氣の失うせ行く老境である。

通り過ぎる村雲がいつの間にか月を隠してしまった。すると最前から瞬まばたきしていた石燈籠いしどうろうの火も心あり氣げにはたと消えるを幸い、二人の男女は庭の垣根に身を摺寄すりよせて互の顔さえ見分けぬほどな闇やみの夜をかえつて心安しと、積つもる思ひのありたけを語り尽つくそうと急あせれば、一時ひとしきり鳴く音を止めた虫さえも今は二人が睦むつ言ごを外へは漏もらさじと庇かばうがように庭一面に鳴きしきる。やがて男は名残惜し氣に幾度いくたびか躊躇ためらいつつも漸おそくに氣を取直し地に落ちた手拭に再び顔をかくして立上ると、女も同じく落ちたる櫛くしに心こころづき付ながら乱れた姿を恥らう色もなく少時しばし寄添い、やがて男が出て行く庭木戸を閉めた後あとまでもなかなか

その場を立ち去りかねた様子であつた。

# 五

翌日あくるひの朝種彦は独り下座敷したざしきなる竹の濡縁ぬれえんに出て顔を洗い食事を済ました後のちさえ何を考へるともなく折々毛拔けぬきで頤鬚あごひげを抜きながら、昨夜ゆうべ若い男女の忍び逢あつたあたりの庭に面おもてに茫然眼を移していた。折から、「おや先生もうお目覚めめざまめでいらッしやいますか。」

「大層お早いじや御座いせんか。」といいながら愛雀軒あいじゃくけんという扁額へんがくを掛けた庭の柴折戸しおりどを遠慮なく明けて入つて来たのは柳下亭種員りゅうかていたねかずに笠亭仙果りゅうていせんかと呼ぶ兩人の門弟である。全くいつもより朝はまだよほど早かつたらしい。二人が押開く柴折戸の裾すそに触れて垣際かきぎわに茂つた小笹おささの葉末から昨夜ゆうべのままなる露の玉が、斜ななめにさし込む朝日の光にきらきらと輝きながら苔こけの上にこぼれ落ちた。種彦は機嫌よく、

「朝起あさおきは老人としよりのくせさ。お前たちこそ今日は珍らしく早起をしたもんだな。それとも昨夜ゆうべの幕の引つ返しという図かね。」

「てつきり恐縮と申上げたい処ですが近頃はどうぞ致しまして。どこもかしこも火の消えた

ようでいや早や情ない位で御座います。」

「いずこも同じ秋の夕暮かナ。」と種彦は戯れながらふと植込に吹入る朝風の響に、

「いや暑い暑いといっている中もう秋風が吹くと見える。」

「眼にはさやかに見えねどもと古歌にも申す通り、風の音にぞ驚かれぬるで御座います。」  
 といいながら種員は懐中の手拭を出して雪駄ばきの裾を払い濡縁の上に腰を下したが、  
 仙果は丁度己が佇んだ飛石の傍に置いてある松の鉢物に目をつけ、女の髪にでも触るよ  
 うな手付で、盆栽の葉を撫でながら、

「先生これアいつお求めになりました。木の太さといい枝ぶりといい実に見事な盆栽で御座いますな。」

「それはこの中請地村の長兵衛という松師に頼まれて、庭木戸の額を書いてやった返礼に貰ったのだが、売買いにしたらなかなか吾輩の手に這入る品ではあるまい。」

「お屋敷方でも滅多にこんな名木は見られますまい。」と種員も今は銜煙管のまま庭の方へ眼を移したが突然思い出したように、「先生。こういう盆栽なんぞはいかがなものでしょう。当節じややはり雛人形や錦絵なんぞと同じように表向には出せない品なので御座いましょうか。」

「勿論もちろんそのはずだろうさ。」と種彦は無造作にいい捨てて銀の長煙管ながぎせるで軽く灰吹はいふきを叩たたいた。

「へーえ。やつぱり不可いけないんで御座いますかね。こうなると手前共にやどうもお上かみの御趣意しゆいが分りかねます。」

「なぜさ、無益なものに贅ぜいを尽つくすなど申すのではないか。」

「それがで御座りますよ。大きな声では申されませぬが私わたくしども共どもの考えますには無益なものに手数てすうをかけて楽しんでいられるようなら此様結構こんなな事はないじや御座いませんか。天下太平国土安穩てんねいなりやアこそ楽しんでおられるんで御座います。もしこれが明暦めいれきの大火事や天明てんめいの飢饉ききんのような凶年ばかり続いた日にや、いくら贅ぜい沢たくがいたしたくてもまさかに盆栽や歌俳諧はいかいで日を送るわけにも行きますまい。ところが当節の御時勢は下々しもしもの町人風情ふぜいでさえちよいと雪でも降つて御覧ごらんじろ、すぐに初雪や犬の足跡梅の花位の事は吟咏くちやうみます。それと申すも全く以て治まる御世みよのおかげ、このような目出たい事は御座いますまい。」

「なるほどこれア種員さんのいいなさる通り。恐れながら手前なぞも今度の御趣意しゆいについてちや随分と腑ふに落ちない事が御座います。」

盆栽に氣を取られていた仙果もいつか縁側に腰をかけ、あたりに聞く人もないと思う安心から種員と一緒にたつて遠慮なくその思う處を述べようとする。

「下々の手前たちがとやかくと御政事向の事を取沙汰致すわけでは御座いませんが、先生、昔から唐土もうこしの世には天下太平の兆しるしには綺麗きれいな鳳凰ほうおうとかいう鳥が舞まい下ると申します。

しかし当節のようにこう何も彼も一概に綺麗なもの手数のかかったもの無益なものは相ならぬと申してしまつた日には、鳳凰なんぞは卵を生む鶏じや御座いませんから、いくら出て来たくも出られなかうじや御座いませんか。外ほかのものはとにかくと致して日本一お江戸の名物と唐天竺からてんじくまで名の響いた錦絵まで御差止めになるなぞは、折角天下太平のお祝いを申しに出て来た鳳凰の頸くびをしめて毛をむしり取るようなものじや御座いますまいか。」

「はははは。幾いほどお前たちが口惜くちしく存じても詮せんない事さ。とかく人の目を引くような綺麗なものは何の彼かのと妬ねたまれ難癖を付けられるものさ。下々の人情も天下の御政事も早い話が皆同じ訳合わけあいと諦めてしまえばそれで済むこと。あんまり大きな声で滅多めったな事をいいなさるな。口舌こうぜつ元来がんらい禍わざわい之の基もと。壁にも耳のある世の中だ。まアまア長いものに

は巻かれていますが一番だよ。」

「それアもう仰有おつしやるまでもなく承知いたしております。つまらない饒舌おしゃべりをして掛かけ

替えのない首でも取られた日にや御溜おたまりこぼし小法師が御座いませんや。こういう時には何か一首巧うまい落首らくしゅでもやって内所ないしよでそつと笑っているが関の山で御座います。」

「落首といえばそうそう、昨夜先生がお帰りになつてから鶴屋の旦那に聞いた話で御座りますが、あの和泉町いずみちようの一勇齋いちゆうさい国芳くによしさんが今度の御政事向の事をばそれとなく「源みなもとの頼光らいこう御寝所ごしんじよの場」に譬たとえて百鬼夜行ひゃつきやこうの図を描き三枚続きにして出したとかいう事で御座ります。」

「いや早や、あの男も持つて生れた悪い病がまだ直らぬと見える。国芳も国貞とくさだも俱ともに故人豊国翁の高弟だが、二人はまるで気性がちがい国芳は喧嘩けんかの好きな勇みな男いかさまその位の事はしかねまいて。一寸いっすんの虫にも五分ごぶの魂たまというが当節はその虫をばじつと殺していねばならぬ世の中。ならぬ堪忍するが堪忍とはまず此処ここらの事だわ。」

「何に致せいやな恐ろしい世の中になつたもので御座います。この分では先生。とても

『田舎源氏』の後篇もいつ拝見致される事やら、情ない事で御座いますなア。」

「私わたしも最もう追々おいおいに取る年だ。世間の取沙汰しずかの静しずかになるのを待つてゐる中うちには大方眼も見えず筆を持つ手も利かなくなろう……。」

淋さびしい微笑と共に種彦は言葉を絶やした。二人の門弟も今は言出すべき言葉なく、遣場やりば

のない視線をば追々に夏の日のさし込んで来る庭の方へ移したが、すると偶然垣根の外には大方一月寺あたりから来る虚無僧であろう、連管に吹き調べる「虚空鈴慕」の一曲が一座の憂愁をば一層深くさせるようにいとど物淋しく聞え出すのであった。

## 六

夏の盛の六月もいつか晦日近くなつた。お江戸の町々を呼歩く蚊帳売の声と定齋売の環の音に、日盛の暑さは依然として何の変りもなかったが、とにかく暦の表だけではいよいよ秋という時節が来ると、道行く若いものの口々には早くも吉原の燈籠の噂が伝えられ、町中の家々にも彼方此方と軒端の燈籠が目につき出した。

土用の明けるその日を期して、池上の本門寺を始め諸処の古寺では宝物の虫干かたがた諸人の拝観を許す処が多い。種彦の家でも同じくその頃に毎年蔵書什器の虫払をする。そしてその日の夕刻からは極く親しい友人や門弟が寄集つて主人柳亭翁が自慢の古書珍本の間に酒を酌み妓を聘して俳諧または柳風の運座を催すのが例であつた。けれども今年ばかりはわざわざそれらの蔵書什器を取り出して厳しい禁令の世の風に曝す

という事がいかにも空恐ろしく思われた処から、種彦はわが秘蔵の宝をもよし、蠱が喰うならば喰うがままにと打捨てて置く事にした。

實際種彦はもう何をする元氣もなくなってしまったのである。老朽ちて行くその身とは反対に、年と共にかえつて若く華やかになり行くその名声をば、さしもに広い大江戸は愚か三ヶ《さんが》の津の隅々にまで喧伝せしめた一代の名著も、あたらこのまま完成の期なく打捨ててしまわなければならぬのかと思うと、如何にしても癒しがたい憂憤の情は多年一夜の休みもなく筆を執つて来た精魂の疲労を一時に呼び起し、あるかぎりの身内の力を根こそぎ奪い去ってしまったような心持をさせるのである。禁令の打撃に長閑な美しい戯作の夢を破られなかった昨日の日と、禁令の打撃に身も心も恐れちぢんだ今日の日の間の境からは、劃然として消す事のできない境界ができた。そして今日という暗澹たる此方の境から花やかな昨日という彼方の境を打眺めて見ると、わが生涯というものは今や全く過去に属して已に業にその終局を告げてしまったものと思われぬ。何一ツ将来に対して予期する力のなくなつた心のほどのいたましきは己が書斎の書棚一ぱいに飾つてある幾多の著作さえ、それらは早何となく自分の著作というよりはむしろ既に死んでしまつた或親しい友人——その生涯の出来事を自分は尽く知り抜いている或親しい友人の遺書であ

るような心持がする。

種彦は日ごと教を乞いにと尋ねて来る門弟たちをも次第々々に遠ざけて、唯一人二階の一間に閉籠つたまま、昼となく夜となく、老眼鏡の力をたよりにそもそも自分がまだ柳の風成なぞと名乗つて狂歌川柳を口咏んでいた頃の草双紙から最近の随筆『用捨箱』なぞに至るまで、凡て立派な套入にしてある著作の全部をば一冊々々取出して読み返しつつ、あああの双紙を書いた時分には何をしていた。ああこの物語を書いた頃には自分はまだ何歳であつたかと徒に耽る追憶の夢の中に、唯うつらうつらとのみその日その夜を送り過した。宛ら山吹の花の実もなき色香を誇るに等しい放蕩の生涯からは空しい痴情の夢の名残はあつても、今にして初めて知る、老年の慰藉となるべき子孫のない身一ツの淋しさ果敢さ。それを堪え忍ぼうとするには全く益もない過去の追憶に万事を忘却する外はない……。

七夕の祭はいつか昨日と過ぎた。小夜更けてから降り出した小雨のまた何時か知ら止んでしまった翌朝、空は初めていかにも秋らしくどんよりと搔曇り、濡れた小庭の植込からは爽やかな涼風が動いて来るのに、種彦は何という訳もなく瓦焼く烟も哀れに橋場今戸の河岸に立初める秋の風情の尋ねて見たく、臥床を出るや否やいそいで朝飯を準備えよ

うと下座敷へ降りかけた時、出合頭にあわただしく梯子段を上つて来たのは年寄った宿の妻であつた。しかも容易ならぬ事件を種彦に伝えたのである。

小雨そぼ降る七夕の昨夜久しく隠まつて置いたかのお園は何処へか出奔してしまつたものと見え今朝方寢床は藻抜の殻となり、残るは唯男女が二通の手紙ばかりという事である。種彦は机の上の眼鏡取るより早く男女の手紙を読み下した。海山にもかへがたき御恩を仇にいたし候罪科、来世のほどもおそろしく存じまゐらせ候……とあつてお園の方の手紙にはただ二世も三世までも契りし御方のお身上に思いがけない不幸の起りしたため、とてもこの世では添われぬ縁故、一先ずわが親里の知人をたより其処まで落延びてから心安く未来の冥加を祈り、共々にあの世へ旅立つという事の次第がこまごまと物哀れに書いてあつた。覚えず涙に曇る眼を拭い種彦はやがて男の手紙を開くに及んで初めて深い事情を知り得た。先頃から、これも要するにこの度の御政事向御改革の影響といわねばならぬ。若旦那の親元なる紙問屋は江戸中間屋十組の株が突然御廃止になつたため、それやこれやの手違いより俄に莫大の損失を引起し家倉を人手に渡すも今日か明日かという悲運に立至つた。親の家が潰れてしまえば頼みに思う番頭から詫びを入れて身受の金を才覚してもらおうという望も今は絶えた訳。さらばといつてどうして今更お園をば二度と憂

き川竹の苦界へ沈られよう。身受する力も望みもなくなつて唯いつまでも大金のかつた女を人の家に隠匿つて置いたなら、わが身のみかは恩義ある師匠にまでいかなる難儀を掛けるも測られぬ。それ故事の面倒にならぬ中わが身一つに罪を背負つて死出の旅路を志し申候。何とぞ後の回向をたのむとあつた。

種彦は菱垣船や十組問屋仲間の御停止よりさしもに手堅い江戸中の豪家にして一朝に破産するものの尠くない事を聞知つていた処から、今更ながら目の当りこの度の法令の恐しい上にも恐しい事を思知るばかり。死に行くという若いもの供の身の上についてはさしずめ如何なる処置を取つてよいのやら全く途方に暮れてしまった。

## 七

全くどうにも仕様のないこの場合に立至つては今更のめのめと柳絮が親元の紙問屋へ相談にも行かれず、同時に廓の方面にもいわばそれとなく自分が身受の証人にもなったような関係がらうつかりと顔出しも出来ぬ。といつてこのまま知らぬ顔に打捨てても置かれまいと種彦は思案に暮れたあまり、ふらりと家を出で足の向く方へと歩いて行つた。歩

いて行く中<sup>うち</sup>には何とかよい考えが出るかも知れぬとたよりにならぬ事をたよりにするより仕様がなかつた。

さまざまな物売の声と共にその辺<sup>へん</sup>の櫺子窓<sup>れんじまど</sup>からは早や稽古<sup>けいこ</sup>の唄<sup>うた</sup>三味線<sup>しみせん</sup>が聞え、新道の路地口<sup>ろじぐち</sup>からは艶<sup>なまめ</sup>かしい女の朝湯に出て行く町家<sup>まちや</sup>つづきの横<sup>よこ</sup>町<sup>ちよう</sup>は、物案<sup>ものあん</sup>顔<sup>が</sup>に俯向<sup>うつむ</sup>いて行く種彦<sup>すくさま</sup>をば直様<sup>すぐさま</sup>広い並木<sup>おどおり</sup>の大<sup>お</sup>通<sup>と</sup>へと導いた。すると忽ち<sup>たちま</sup>河岸<sup>かし</sup>の方<sup>さつ</sup>から颯とばかり真正面<sup>まとも</sup>に吹きつけて来る川風の涼しさ。種彦はさすがに心の憂苦を忘れ果てるといではないが、思えばこの半月あまりは一步<sup>ひとあし</sup>も戸外<sup>そと</sup>へ出ず引籠<sup>ひきこも</sup>つての味いた時に比べると、おのずと胸も開くような心持になり、少時<sup>しばし</sup>は何の気苦労もない人のように目に見える空と町との有様をば訳もなく物珍し氣に眺めやるのであつた。

両側<sup>なな</sup>とも菜飯<sup>なめしでん</sup>田楽<sup>でんがく</sup>の行燈<sup>あんどう</sup>を出した二階立<sup>だて</sup>の料理屋と、往來<sup>おうらい</sup>を狭むるほどに立<sup>たち</sup>連<sup>な</sup>つた葭簀張<sup>よしすはり</sup>の掛茶屋<sup>かけちや</sup>、またはさまざまなる大道店<sup>だいどうみせ</sup>の日傘<sup>ひがさ</sup>の間をば士農工商思い<sup>み</sup>思<sup>な</sup>いの扮装<sup>みなり</sup>形<sup>かたち</sup>をした人々が後から後からと引きも切らずに歩いて行く。それはこの年月幾度<sup>いくたび</sup>と知れず見馴<sup>みな</sup>れた上にも見馴<sup>みな</sup>れた街の有様ながら、しかしここに住馴<sup>たちまち</sup>れた江戸ッ児の馬鹿々々しいほど物<sup>もの</sup>好<sup>ずき</sup>な心には、一日半日の間も置きさえすれば忽<sup>たちまち</sup>にして十年も見なかつた故郷<sup>ふるさと</sup>のように訳もなく無限の興味を感じさせるのである。

早や虫売の荷が見える。花売の籠の中にはもう秋の七草が咲き乱れている。しかし其様  
 事には目もくれずお蔵の役人衆らしいお侍は仔細らしい顔付に若党を供につれ道の真  
 中を威張つて通ると、摺違ひざまに腰を曲めて急がし氣に行過ぎるのは札差の店に  
 働く手代にちがいない。頭巾を冠り手に数珠を持ち杖つきながら行く老人は門跡様へ  
 でもお参りする有徳な隠居であろう。小猿を背負つた猿廻しの後からは包を背負つた丁稚  
 小僧が続く。きいた風な若旦那は俳諧師らしい十徳姿の老人と連れ立ち、角隠しに  
 日傘を翳した上つ方の御女中はちよこちよこ走りの虚無僧下駄に小褌を取つた芸者へ行  
 交えば、三尺帯に手拭を肩にした近所の若衆は稽古本抱えた娘の姿に振向き、  
 菅笠に脚絆掛の田舎者は見返る商家の金看板に驚嘆の眼を睜つて行くと、その建続  
 く屋根の海を越えては二、三羽の鳶が頻と環を描いて舞っている空高く、何処からともな  
 く勇ましい棟上げの木遣の声が聞えて来るのであつた。やや太く低いけれども極めて力の  
 ある音頭取の声と、それにつづいて大勢の中にもとりわけ一人二人思うさま甲高な若  
 い美しい声の打交つた木遣の唄は、折からの穏な秋の日に対して、これぞ正しく大江戸  
 の動かぬ富を作り上げた町人の豪奢と弓矢はもう用をなさぬ太平の世の喜びとを、江戸  
 中の町々へ歌い聞かせるような心持がするのである。

種彦は唯ただどんよりした初秋の薄曇り、この勇いさましい木遣の声に心を取られながらぞろぞろと歩いてゐる町の人々と相前後あひして、駒形こまかたから並木なみきの通りを雷門かみなりもんの方へと歩いて行く中、何時いつともなしに我もまた路行く人と同じように、二百余年の泰平に撫育はぐくまれた安樂な逸民であるといわぬばかり、知らず知らずいかにも長閑のどやかな心になつてしまふのであつた。今更ことごとしく時勢の非なるを憂いたとて何にならう。天下の事は微禄びろくな我々風情がとやかく思つたとて何の足たしにもなろうはずはない。お上にはそれぞれお歴々の方々がおられるではないか。われわれは唯その御支配もとおさまの下に治る御世みよの楽しさを歌にも唄い絵にも写していつ暮れるとも知れぬ長き日を、われ人共に夢の如く送り過すのがせめてもの御奉公ではあるまいか。種彦は丁度豊後節全盛の昔に流行した文金風の遊冶郎ゆうやろうを見るように両手を懷中ふところに肩を落し何処どこを風がという見得みえで、いつのほどにか名高い隅田川すみだがわという酒問屋の前あた辺りまで来たが、すると、忽ち向うに見える雷門の新橋しんばしと書いた大提おおちようち灯んの下から、大勢の人がわいわいいつて駈出かけだして来るのみか女の泣声までを聞付けた。ソラ喧嘩けんかだ人殺ひところしだというが早いか路行く人々は右方左方へ逃惑にげまどうものもあれば、我遅れじと駈けつけるものもある。その後につづいて町の犬が幾匹ともなく吠えながら走る。種彦は依然として両手を懷中ふところにこの騒ぎも繁華なお江戸ならでは見られぬものといわ

ぬばかり街の角に立止つて眺めていたが、しかし走交う群集に遮られて実は何の事件や  
ら一向に見定める事が出来なかつたのである。

「先生。」と突然横合から声をかけたものがある。

「いや。仙果に種員か。あの騒ぎは一体どうしたものだ。」

「先生。大変な騒ぎで御座ります。奥山の姐さんが朝腹お客を引込もうとした処を  
隠密に見付りお縄を頂戴いたしたので御座ります。」

「ふうむさようか。」と種彦もさすが事件の意外なるに驚いた様子。「奥山の茶見世など  
は昔から好からぬ処ときまつたものではないか。今更隠売女の一人や二人召捕えた処  
で仕様もあるまい。」

「先生それではまだ昨夜からの騒ぎを御存じがないと見えますな。」

「はて、昨夜からの騒ぎというのはそれア何事だ。お前たちも知つての通り私は先月以  
来外へ出るのは今日が初めて……。」

「実はこれから二人して御機嫌伺いに上ろうと思つていた処で御座ります。今日はもうど  
こへ参りましてもその話ばかりで持切つております。昨日の晩花川戸の寄席で娘浄  
瑠璃が縛られる。それから今朝になつて広小路の芸者屋で女髪結が三人まで御用

になりました。何でもつい二、三日前御本丸で御役替おやくがえがありまして、大目付おおめつけの鳥居とりいさ様が町奉行におなり遊ばしてから俄にわかに手厳しい御詮議ごせんぎが始まったとやら。手前供どもの町内などでも名主なぬしや家主いえぬしが今朝はもう五ツ頃から御奉行所へお伺いに出るような始末で御座います。」

「なるほど、それは全く容易ならぬ次第だな。」

「先生、まだそればかりでは御座りません。昨夜ゆうべちよつと櫓やぐら下したの方へ参りましたら、

何でも近い中に御府内ごふないの岡場所は一ツ残らずお取払いになるとかいう騒ぎで、さすがの辰た巳つみも霜枯れ同様寂れきっておりやした。」

「そうか。世の中は三日見ぬ間の桜まではない。桜を散らすとんだ夜嵐よあらし……。」

「先生、とにかく境内を一まわり奥山おくやま辺までお供を致そうじや御在ございませんか。」

「そうさな。人の難儀を見て置くも氣の毒ながらまた何ぞ後の世の語かたりぐさ草くさになろうも知れぬ。どれぶらぶら参ろうか。」

三人は歩き出した。雷門前の雑沓ざつとくはどうやら静まった様子であるが、まだこの辺へんをばあちこちと不安な顔付して行交う人たちの口々に、町木戸まちきどの大番屋おおばんやで召捕めしとられた売女の窮命きゆうめいされている有様が尾に鱗添ひれえていかにも酷むごたらしく言伝えられている最さいちゆう中である。

種彦を先に種員と仙果は雷門を這入<sup>はい</sup>つて足早に立並ぶ数珠屋<sup>じゆずや</sup>の店先を通<sup>とお</sup>り過ぎ二十軒茶屋<sup>や</sup>の前を歩いて行<sup>い</sup>つたが、いつも五月蠅<sup>うるさい</sup>ほどに客を呼ぶ女供<sup>ども</sup>はやがて仁王門を這入<sup>はい</sup>つた楊子店<sup>ようじみせ</sup>も同じ事で、いずれも真蒼<sup>まつさお</sup>な顔をして三人四人と寄合<sup>かなたこなた</sup>いながら何やらひそひそ話合<sup>わ</sup>つていると、土地の顔役らしい男がいかにも事あり氣に彼方<sup>かなた</sup>此方<sup>こなた</sup>と歩き廻<sup>まわ</sup>つていた。しかし何と言<sup>い</sup>つてもさすがは広い觀音の境内、今<sup>いま</sup>方<sup>がた</sup>そんな騒ぎのあつたとも心附<sup>こころづ</sup>かぬ参詣<sup>さんけい</sup>の群集<sup>ぐんじゆ</sup>は相も変らず本堂の階段を上<sup>あ</sup>り下<sup>お</sup>りしていると、いつものように、これも念仏堂の横手に陣取<sup>まつ</sup>つた松井源水<sup>まついげんすい</sup>、またはかの風流志道軒<sup>ふうりゅうしどうけん</sup>の昔より境内の名物となつた辻講釈<sup>つじかうしゃく</sup>を始めとして、その辺<sup>へん</sup>に同じように蓐簀張<sup>よしずはり</sup>の小屋を仕つらえた乞食芝居<sup>こじきしばい</sup>や桶拔<sup>おけぬ</sup>け籠<sup>かごぬけ</sup>拔<sup>ぬ</sup>などの輕業師<sup>かるわざし</sup>も追々に見物を呼び集めてい<sup>い</sup>る処であつた。

一同はそれらの小屋をも後にして俗に千本桜といわれた桜の立木の間をくぐり抜<sup>き</sup>け、金<sup>きん</sup>竜<sup>りゆうごん</sup>山境内の裏手へ出るとそぞろ本山開基の昔を思<sup>おも</sup>わせるほどの大木が鬱<sup>うつ</sup>々として生<sup>お</sup>茂<sup>も</sup>つてい<sup>い</sup>る。その木陰<sup>こかげ</sup>に土弓場<sup>どきゆうば</sup>と水茶屋<sup>みづちや</sup>の小家<sup>こいえ</sup>は幾軒となく低い鱗<sup>こけらぶき</sup>葺<sup>ぎ</sup>の屋根を並<sup>なら</sup>べてい<sup>い</sup>るのである。毎夜<sup>まいや</sup>頬<sup>ほ</sup>冠<sup>かむり</sup>して吉原<sup>よしわら</sup>の河岸通<sup>かしのど</sup>をぞめて歩くその連中<sup>つたな</sup>と同じ<sup>おな</sup>じよな身<sup>み</sup>なりの男<sup>おとこ</sup>が相<sup>あい</sup>も変<sup>あ</sup>らずその辺<sup>へん</sup>をぶらりぶらり歩いていたが、さすがに唯<sup>ただ</sup>今<sup>いま</sup>方<sup>がた</sup>世<sup>よ</sup>にも恐<sup>おそ</sup>ろしい騒動<sup>さうどう</sup>のあつた後<sup>あと</sup>とて女供<sup>おんな</sup>は一<sup>いっ</sup>斉<sup>せい</sup>に声<sup>こゑ</sup>を潜<sup>ひそ</sup>め姿<sup>すがた</sup>を隠<sup>かく</sup>してしまつたので、いつもは

それほどに耳立たない裏田圃の蛙の啼く音と梢に騒ぐ蟬の声とが今日に限って全くこの境内をば寺院らしく幽邃閑雅にさせてしまったように思われた。さながら人なき家の如く堅くも表口の障子を閉めてしまった土弓場の軒端には折々時ならぬ病葉の一片二片と閃き落ちるのが殊更に哀深く、葭簀を立掛けた水茶屋の床几には徒に磨込んだ真鍮の茶釜にばかり梢を漏る初秋の薄日のきらきらと反射するのがいい知れず物淋しく見えた。何処か見えない木立の間から頻と笑うが如き鳥の声が聞える。

種彦は何という訳もなく立止って梢を振仰いだ。枯枝の折れたのが乾いた木の皮と共に木葉の間を滑って軽く地上に落ちて来る。大方蟬を啄もうとして鳥はその餌を追うて梢から梢にと飛移つたに違いない。仙果は人氣のない水茶屋の床几に置き捨ててある煙草盆から勝手に煙草の火をつけようとして、灰ばかりなのにちよつと舌鼓を打つたが、そのまま腰を下し懷中から火打石を捜出しながら、

「先生一服いかがで御座います。いつもなら、のう種員さん、この辺は河岸縁の三日月長屋も同然滅多に素通の出来る処じやないんだが、今日はこうして安閑と煙草が呑んでいられるたア何だか拍子抜けがして狐にでもつままれたようだ。」

「真白なこんこん様は何処の御穴へもぐり込んだのか不思議に姿をくらましたもんさな。」

何しろ涼しくつて閑静でいい。それにいくら涼んでもお茶代いらすというのだからこれがほんに有難山ありがたやまの時鳥ほととぎすさ。」と腰なる一提ひとつさげを取出して種員は仙果の煙管きせるから火をかりて一服した。

なるほど涼しい風は絶えず梢の間から湧わき起つて軽く人の袂たもとを動かすのに種彦もいつか門人らと並んで、思掛けない水茶屋みずちやの床几しょうぎに腰を下し草臥くたふれた歩を休ませた。折から梢の蟬なくねの鳴音いちじをも一時に止めるばかり耳許みみもと近く響き出す弁天山べんてんやまの時の鐘。数うれば早ひるや正午の九つを告げている。種彦はどこかこの近辺に閑静で手軽な料理茶屋でもあらば久ぶり門人らと共に中食ちゆうじきを準えたいと言出すと、毎日のぞめき歩あるきに至極案内知つたる柳下亭種員たねかず心得たりという見得みえで、雪駄せつたの爪先つまさきに煙管をぽんとはたき、「では先生、早速あの突当りの菜飯茶屋なめしぢやなどはいかがで御座いましょう。山東翁さんとうおうが『近き世奇跡考』に書きました金竜山きんりゆうざん奈良茶の昔はいかがか存じませんが、近頃は奥山の奈良茶もなかなかこつたものを食わせやす。それに先生御案内でも御座いましょうが、お座敷から向う一面に裏田圃うらたんぼを見晴す景色はまた格別で御座いますよ。丁度今頃は田圃はすの花が咲いておりましよう。」

## 八

一同は早速水茶屋の床几をはなれ、ここにも生茂る老樹のかげに風流な柴垣を結廻らした菜飯茶屋の柴折門しおりもんをくぐった。なるほど門人種員の話した通り打水清き飛石とびいしづたい、日よを避ける夕顔棚からは大きな糸瓜へちまの三つ四つもぶら下っている中庭を隔てて、茶がかつた離れの小座敷へと通るや否や明放した濡縁ぬれえんの障子から一目に見渡した裏田圃の景色。これは全く格別の趣きである。これは即ち南宗なんしゅう北宗ほくしゅうより土佐住吉四条とさすみよししじょう円山まるやまの諸派にも顧みられず僅わずかに下品極まる町絵師が版下はんしたえ絵の材料にかなり得なかつた特種とくしゅの景色である。狂歌川せんりゅう柳の俗氣を愛する放蕩背倫ほうとうの遊民にのみいうべからざる興趣を催させる特種の景色である。即ち左手には田町たまちあたりには立続く編笠茶屋あみがさぢやと覺おぼしい低い人家の屋根を限りとし、右手は遙はるかに金杉かなすぎから谷中やなか飛鳥山あすかやまの方へとつづく深い木立を境にして、目の届くかぎり浅草の裏田圃は一面に稲葉の海を漲みなぎらしている。その正面に当ってあたかも大きな船の浮ぶがように吉原よしわらの廓くわはいずれも用水桶を載せ頂いた鱗こ茸けらぶきの屋根を聳そびやかしているのであつた。

薄く曇つた初秋の空から落る柔かな光線ひかげは快く延切のびきつた稲の葉の青さをば照輝く夏の日

よりもかえつて一段濃くさせたように思われた。彼方かなた此方こなたに浮んだ蓮田はすだの蓮の花は青田の  
 ビロウド天鵞絨てんぎようじゆに紅白の刺繡ぬいとりをなし打戦うちせよぐ稲葉の風につれて得えもいわれぬ香氣を送つて来る。  
 なるこ鳴子なるこや案山子あかしの立つている辺あたりから折々ぱつと小鳥の飛立つごとに、稲葉に埋うづもれた畦道あぜみちか  
 ら駕籠かごを急がす往来ゆききの人の姿が現れて来る。それは田圃の近道をば田面の風と蓮の花の薫  
 りとに見残した昨夜ゆうべの夢を託たくしつつ曲輪くるわからの帰途かえりを急ぐ人たちであらう。

種彦は眺めあかすこの景色と、久ぶりに取上げる杯さかずきの味と、埒らちもない門弟たちの雑談と  
 に、そぞろ今日の外出そとでの無益でなかつた事を喜んだ。全く氣に入つた景色、氣に入つた酒、  
 氣に入つた雑談。この三拍子が遺憾なく打揃うちそろうという事は人生容易に遇あいがたい偶然の  
 機を俟またねばならぬ。偶然の好機は紀文きぶん奈良茂ならもの富を以てしてもあながちに買い得るもの  
 とは限られぬ。女中が持運ぶ蜆しじみ汁じゆと夜時よまきの胡瓜きゅうりの酸すの物秋茄子あきなすのしぎ焼などを肴さかなに  
 して、種彦はこの年月としつき東都一流の戯作者げさくしやとして凡そ人おほの羨む場所うらやには飽果あきはてるほど出  
 入いりした身でありながら、考えて見れば雨や風のさわりなく主客共に能く一日半夜の歡会かんかい  
 に逢あい得たる事いくばくぞと、さまざまなる物見遊山ゆさんの懷旧談に時の移るのをも忘れてい  
 たが、折から一同は中庭を隔てた向うの小座敷に先ほどから頻しきりと手を鳴らしていたお客が  
 遂に亭主らしい男を呼付けて物荒くいのし罵り初めた声を聞付けた。客は詠あつちえた酒肴さけさかなの

あまりに遅い事を憤り、亭主はそれをばひたあやまりに謝罪あやまつていると覺しい。そう心付いて見れば一同の座敷も同じ事、先ほど誂はつたけえた初茸はつたけの吸物もまたは銚子ちようしの代りさえ更に持つて来ない始末である。別に大勢の客が一度に立込たてこんで手が足りぬというのでもないらしい。どうした事かと仙果は二、三度続けざまに烈はげしく手を鳴らしたが、すると、以前の女中が銚子だけを持つて来ながら息使いも急せわしく甚いたくも狼狽うろたえた様子で、

「どうも申訳ごんざいが御在ございません。どうぞ御勘弁を……。――とばかり前髪から滑り落ちる簪かんざしもそのままにひたすら額ひたいを畳すりつへ摺すり付けていた。

「こう、姐ねえさん。どうしたもんだな。そうむやみやたらに謝罪あやまられても始まらねえ。お爛かんはつけずお肴さかなはなしというのじゃ、どうもこれアお話にならないじゃねえか。」

「唯今帳場からお詫わびに出ると申しております。どうぞ御勘弁をなすつて下さりませ。」

「それじゃ姐さん、酒も肴も出来ねえといいなさるんだね。」

「出来ない何のと申す訳わけでは御座いませんが、旦那。実は大変な事になりましたので御座います。今が今とて、定巡じようまわりの旦那衆がお出でになりました、その方ほうどもでは時節ときふしちがいの走物はしりものを料理に使つてはいないかと仰おつしや有りまして、洗場あらいばから帳場の隅々までお改めになつてお帰りになるかと思えば、今度は入違いれちがいに伝法院でんぽういんの御役僧おやくそうと町方まちかたの

御役人衆とがお出いでになり、お茶屋へ奉公する女中たちはこれから三みつ月中に奉公をやめて親元へ戻らなければ隠かく売女ばいじょとかいう事にいたして、吉原よしわらへ追遣おいやつてお女郎じやろうにしてしまふからと、それはそれは厳しいお触ふれで御座います。」

種彦初め一同は一時に酒の酔を醒さましてしまった。女中はもう涙をほろほろ滾こぼしながら相手選かみばず事情を訴えようとする。

「お上の旦那衆もあんまりお慈悲がなさすぎるでは御座いませんか。こうして手前供てんどもがお茶屋へ奉公いたしておりますのをどうやら好きこのんで猥みだらな事でもいたすように仰有います、まアお聞きなすつて下さいまし。こうして私がお茶屋奉公でもいたさなければ、母親ははおやや亭主が日干しになつてしまうので御座います。亭主は足腰が立ちませんし母親は眼が不自由な因果な身の上で御座ります……。」

先ほど手を鳴らし立てた元氣は何処へやら、一同は左右から女中をいい慰め一刻も早くこの場を立去るより仕様がな。わずかにその場の空腹をいやすためもう誂しゅうぎえべき料理とでもない処から一同は香物かうのものに茶漬をかき込み、過分の祝儀しゅうぎを置いてほうほうていの体で菜飯茶屋なめしぢややの門かどを出たのである。

「種員さん、いよいよ薄気味の好よくねえ世の中になつて来たぜ。岡場所は残らずお取払い、

お茶屋の姐さんは吉原へ追放、女髪結に女芸人はお召捕り……こうなつて来ちやどうしてもこの次は役者に戯作者という順取だ。」

「こうこう仙果さん。大きな声をしなさんな。その辺に八丁堀の手先が徘徊していねえとも限らねえ……。」

「鶴亀々々。しかし二本差した先生のお供をしていりやア与力でも同心でも滅多な事はできやしめえ。」と口にはいつたけれど仙果は全く気味悪そうに四辺を見廻さずにはいられなかった。

それなり種彦を初め一同は黙然として一語をも発せず、訳もなく物に追われるように雷門の方へ急いで歩いた。

## 九

久しぶりの散歩に思の外の疲労をおぼえ、種彦はわが家に帰るが否や風通しのいい二階の窓際に肱枕してなおさまさまに今日の騒ぎを噂する門人たちの話を聞いていたが、する中にいつか知らうとうとと坐睡んでしまった。

疲れ果てた戯作者の魂は怪し気なる夢の世界へとさまよい出したのである。

最初に門人らの話声が近くなり遠くなりして、いかにも懶くまた心地よく耳許に残っていたが、いつか知ら風の消ゆるが如く潮の退く如くに聞えなくなってしまうと、戯作者の魂は忽ちいずこからとも知れず響いて来る幽な金棒の音を聞付けた。今時分不思議な事と怪しむ間もなく、かの金棒の響は正しく江戸町々の名主が町奉行所からの御達を家ごとに触れ歩くものと覺しく、彼方からも此方からも互に相呼応しつつさながら嵐の如くに湧起つて来るのである。それと共に突然川水の流るる音が訳もなく高まり出した。種彦は屋根船の中に揺られながら眠っているような心持もすれば、また高い青楼の二階の深い積夜具の中にふうわりと埋まっているような心地もする。とにかく驚いて顔を上げると、自分の身体のある処よりも遙に低く、雨氣を帯びた雲の間をば一輪の朧月が矢の如くに走っているのを見た。町の木戸が嚴重に閉されていて番太郎の半鐘が叩く人もいないのに独で勝手に鳴響いている。種彦は唯ただ不審の思をなすばかり。通過する人でもあらば聞質したいと消えかかる辻番所の燈火をたよりに、頻と四辺を見廻すけれど、犬の声ばかりして人影としては更にない。何となく胸騒ぎがして何処へという当もなく一生懸命に駈出し初めると、忽ち目の前に大きな橋が現われた。種彦は足にまかせて瞬時

も早く橋を渡り過ぎようすると、突然後から兩方の袂をしつかりと押えて引止めるものがある。何者かと思つて振返ると、心中でも仕損じた駈落者とおぼしく、橋際へ晒者になつてゐる二人の男女があつて、その両手は堅く縛められてゐる処から一心に種彦の袂をば齒で啣えていたのであつた。あまりの気味悪さに覚え腰なる一刀を抜手も見せず切放すと二つの首は脆くも空中に舞飛んで鞆の如くにくろくろと種彦の足許に転落ちる。その拍子にふと見れば、こはそも如何に男は間違う方なく若旦那柳絮、女はわが家に隠匿つたお園ではないか。しまつた事をした。情ない事をした。許してくれと、種彦は地に跪ずいて落ちたる二つの首級を交々に抱上げ活ける人に物いう如く詫びてゐると、何時の間にやら、お園と思つたその首は幾年か昔己れが西丸のお小姓を勤めていた時、不義の密通をした奥女中なにかしの顔となり、また柳絮と思つたその首は幾年の昔堺町の楽屋新道辺で買馴染んだ男娼となつていた。再び恟りして二つの首級をハタと投出し唯茫然としてその場に佇立んでしまうと、いつの間に寄集つて来たものか、菰を抱えた夜鷹の群が雲霞の如くに身のまわりを取巻いて一斉に手を拍つて大声に笑い罵るのである。しかも種彦の眼には数知れぬ夜鷹の顔がどうやら皆一度はどこかで見覚えのある女のように思われた。恐ろしいやら気味悪いやら、種彦は狂気の如く前後左右に

切退け切払い、やつとの事で橋の向うへと逃げのびたが、もう呼吸も絶え絶えになるばかり疲れ果て有合う捨石の上に倒るるように腰を落した。

幸い四辺は静で、もう此処までは追掛けて来るものもないらしい。朧月の光が軟に夜の流を照している。種彦は初めてほつと吐息を漏し、息切れのする苦しさに石垣の下なる杭につかまり身を這わせるようにして掌に夜の流を掬上げようとすると、偶然にも木の葉のように漂つて来る一箇の杯。今の世に何人の戯れぞ。紀文が杯流しの昔も忍ばるる床しさと思う間もなく、早や二、三艘の屋根船が音もなく流れて来て石垣の下なる乱杭に繋がれているではないか。閉切つた障子の中には更に人の氣勢もないのに唯だ朗かに河東節「水調子」の一曲が奏られている。種彦は先ほどの恐ろしい光景をも全く忘れてしまい今は何という訳もなく二十歳の若い姿を朧夜の河岸に忍ばせて、ここに尋ね寄る恋人を待構えるような心持になっていた。

果せるかな。忽然川岸づたいに駈け来る一人の女がハタとわが足許に躓いて倒れる。抱き起しながら見遣れば金銀の繡取ある襦袢を着横兵庫に結つた黒髪をば鼈甲の櫛笄に飾尽した傾城である。いかなる訳あつて夜道を一人何処へといったわりながら聞く間もおそし、後から飛んで来る追手の二、三人、物をもいわず襦袢を剥取つてず

たずたに引裂き鼈甲の櫛笄や珊瑚の簪をば惜気もなく粉微塵に踏碎いた後、女を川の中へ投込んだなり、いかにも忙しそうに川岸をどどん駈けて行く。種彦はあまりの事に少時はその方を見送つたなり、呆然として佇立んでいたが、すると今までは人のいる氣勢もなかった屋根船の障子が音もなく開いて、

「先生。柳亭先生。お久ぶりで御座ります。」と親し気に呼びかける男の声。見れば濃い眉を青々と剃り眼の大きい口尻の凛々しい面長の美男子が、片手には大きな螺旋の煙管を持ち荒い三升格子の襦袍を着て屋根船の中に胡坐をかいてしていると、その周囲には御殿女中と町娘と芸者らしい姿した女がいずれ劣らずこの男に魂までも打込んでいるという風にしなだれ掛つていた。種彦驚き、

「これはお珍しい。貴公は木場の白猿子では御座らぬか。」

「いかにも七代目海老蔵に御座います。久しくお目にかかりませぬが先生には相変らず御壮健。恐悦至極に存じます。」

「いや、拙者なぞもこの時節がらいつどのような御咎を蒙る事やら落人同様風の音にも耳を欻てています。それやこれやでその後はついぞお尋ねもせなんだがこの間はまたとんだ御災難。とうとうお江戸構いとやら聞きましたがお思掛けない今時分どうして此処へは

お出でなすつた。」

「その不審は御尤も。実は今日まで先祖の菩提所なる下総の在所に隠れておりましたが是非にも先生にお目にかかり、折入つてお願い致したい事が御座りまして、夜中そつと中川の御番所をくぐり抜けわざわざ爰までやつて参りました。」

「はて拙者のようなものに折入つてお頼みとは。」

「外の事でも御座りませぬ。あれなる二艘の屋根船に積載せました金銀珠玉の事で御座ります。実は当年四月木挽町の舞台にて家の狂言「景清」牢破りの場を相勤めおりまする節突然御用の身と相なり、遂に六月二十二日北御番所のお白洲にて役者海老蔵事身分を弁えず奢侈僭上の趣不届至極とあつて、家財家宝お取壊の上江戸十里四方御追放仰付られましたが、いずれはかような御咎もあるうかと木場の住居お取壊に相ならぬ中、弟子どもが皆それぞれに押隠しました家の宝、それをば取集め、あれなる船に積載せて参つた次第で御座ります。先生へ折入つてお願いと申すは何とぞあれなる宝をばいかようにも致し、後の世まで残しお伝え下さるよう御計らいなされては下さるまいか。諸行無常は浮世のならい某の身の老朽ち行くは、さらさら口惜しいとも存じませぬが、わが国は勿論唐天竺和蘭陀におきまして、滅多に二つとは見られぬ珊瑚玳瑁ぎや

まんの類たぐい、または古人が一世一代いつせいちだいの名作といわれた細工物はいかにお上の御趣意とは申ながらむぎむぎと取壊されるがいかに無念で相なりませぬ。人の生命いのちにはまた生れ替る来世とやらも御座いましょうが、金銀珠玉の細工物は一度壊されては再ふたたびこの世には出て参りませぬ。先生。海老蔵が折入つて御願いと申しますは斯様かようの次第で御座ります。」

言う言葉と共に海老蔵を載せた屋根船はおのずと岸を離れ、見る見る狭霧さぎりの中に隠れて行く。種彦はまア暫くしばら暫くと声を上げ、岸の上をば行きつ戻りつ、消え行く舟を呼び戻そうとしてゐると、忽ちたちま生なま暖かい風がさつと吹き下りて、振乱す幽霊の毛のように打なびく柳の蔭かげからまたしても怪し気なる女の姿が幾人いくたりと知れず彷徨さまよい出で、何ともいえぬ物もの哀あわれな泣声を立て、糸のように瘦やせた裸足はだしのまま頻しきりと地上に落ちた何物かを拾い上げでは限りもなくさめざめと泣き沈むありさま、何事の起つたのかと種彦はふと心付けばわが佇たつずむ地の上は一面に踏ふみくた碎くだかれた水晶瑪瑙琥珀めのうこはくけい鶏けい血く孔雀くじゃく石珊瑚せきさんご鼈べつこう甲かぎやまんびいどろなぞの破片で埋め尽うずつくされている。そして一足でも歩もうとすればこれらの打壊された宝玉の破片は身も戦慄おののかるるばかり悲惨な響ひびきを発し更に無數の破片となつて飛散る。その度たびごとに女の群むれはさもさも恨めし気に此方こなたを眺めては、身も世もあられぬように声を立てて泣くのである。種彦も今は覚えず目がくらんでそのまま水中に転まろび落ちてしまった。彼か

方に流され此方へ漂いする中に、いつか気も心もつかれ果て、遂に脆くも瞼を閉じ水底深く沈んで行つた。かと思うとやがて耳許に聞馴れた声がして、頻と自分呼びながら身体を揺動かすものがある。ふツと眼を開けば何事ぞ、埒もない一場の夢はここに尽きて老いたる妻がおのれを呼覚しているのであつた。

なるほど水の中に沈んだと思つたのも無理はない。秋の夕陽は欄干の上にさし込んでいて、吹き通う風の冷さに蔽うものもなく転寐した身体中は気味悪いほど冷切つてゐるのである。種彦は二度も三度もつづけまにする嚏と共にどうやら風邪を引込んだような心持になつた。

# 十

家ごとに焚く盂蘭盆の送火に物淋しい風の立初めてより、道行く人の下駄の音夜廻りの拍子木犬の遠吠また夜蕎麦売の呼声にも俄に物の哀れの誘われる折から、わけても今年は御法度厳しき浮世の秋、朝な夕なの肌寒さも一入深く身に浸む七月の半過ぎ。修紫楼の燈火は春よりも夏よりも徒にその光の澄み渡る夜もやや深け初めて来た頃

であつた。主人はいつぞや怪しき昼寐の夢から引込んだ風邪の床に今宵もまだ枕についたまま、相も変らずおのが戯作のあれこれをば彼方を一、二枚此方を二、三枚と読返していた折から、突然愛雀軒と題した彼の風雅な庭木戸を叩いたものがある。茶の間の長火鉢に妙振出しを煎じていた妻何心もなく取次に出て見ると、堀田原の町名主を案内にして仲間提灯持たせた中年の侍、小普請組頭よりの使者と名乗つて一封の書状を渡して去る。と間もなく横山町辺の提灯をつけた辻駕籠一挺、飛ぶがように駈来つて門口に止るや否や、中から軋出る商人風の男、「先生は御在宅でいらつしやいますか。鶴屋喜右衛門の手代で御座います。」と声もきれぎれに言うのであつた。手代は主人の寢所に通つて何やら密談に耽つた後門外に待たせた辻駕籠に乗つて再び何処へか飛び去つてしまつたが、それからというものの修紫楼の家の内は俄に物気立つて、咳嗽を交うる主人の声と共にその妻の彼方此方と立働くらしい物音が夜の深け渡るまでも止まなかつた。

丁度その刻限、そんな騒ぎのあらうとは露知らぬが仏、門人の柳下亭種員は新吉原の馴染の許に泊つていたのである。竹格子の裏窓を明けると箕輪田圃から続いて小塚原の灯が見える河岸店の二階に、種員は昨日の午過から長き日を短く暮す床の内、

引廻した屏風びようぶのかげに明六ツならぬ暮の鐘。敵娼あいかたの女が店を張りにと下りて行つた隙すきを窺うかがい薄暗い行燈あんどうの火影ほかげに頻しきりと矢立やたての筆を噛かみながら、折々は気味の悪い思出し笑いを漏もらしつつ一生懸命に何やら妙な文章を書きつづつていた。種員は草双紙くさそうし類御法度ごはつとのこの頃いよいよ小遣錢にも窮してしまったため国貞門下あるの或絵師と相談して、専ら御殿奉公の御女中衆おじょちゆうしゆうが貸本屋の手によつてのみ窃ひそかに購買あがなし求めるという秘密の文学の創作を思い立つたのであつた。

早や大引おおびけとおぼしく、夜廻よまわりの金棒かなぼうの音、降来る夕立のように五丁町ごちようまちを通過ごぎる頃、屏風の端はしをそつと片寄せた敵娼あいかたの華魁おいらん、

「主アぬし、まだ起きていなんしたのかい。おや何を書いていなます。何処どこぞのお馴染なじみへ上げる文ふみでありんしょう。見せておくんなし。」と立膝たてひざの長煙管ながぎせるに種員が大事の創作をば無造作に引寄せようとする。種員驚き、

「華魁、文じゃねえ、悪く気を廻しなさんな。疑るなら今読んで聞かせやしょう。だがの、華魁。あんまり身を入れて聞きなされると、とんだ勤めの邪魔になりやす。」

こんな口説くぜつよろしくあつて、種員は思いも掛けぬ馬鹿に幸福しあわせな一夜を過し翌朝あくるあさぼんやり大門おおもんを出たのであつた。

どてはつちよう  
土手八丁をぶらりぶらりと行<sup>ゆき</sup>尽<sup>つく</sup>して、山谷堀<sup>さんやぼり</sup>の彼方<sup>かなた</sup>から吹いて来る朝寒<sup>あさざむ</sup>の川風  
に懷<sup>ふところ</sup>手<sup>て</sup>したわが肌<sup>うつり</sup>の移<sup>うつり</sup>香<sup>か</sup>に酔<sup>え</sup>いながら山<sup>やま</sup>の宿<sup>しゆく</sup>の方<sup>かた</sup>へと曲<sup>ま</sup>つたが、すると丁度<sup>ていど</sup>その辺<sup>へ</sup>  
は去年<sup>こぞ</sup>の十月火災<sup>しちふどおり</sup>に罹<sup>か</sup>つた堺<sup>さかい</sup>町<sup>ちやう</sup>葺屋<sup>ふきやちやう</sup>町の替<sup>か</sup>地<sup>ち</sup>になつた処<sup>かへち</sup>とて、ここに新しい芝居<sup>しばいま</sup>  
町<sup>ち</sup>は早くも七分通<sup>しちふどおり</sup>普請<sup>ふしん</sup>を終えた有様<sup>ありさま</sup>である。中村座<sup>なかむらざ</sup>と市村座<sup>いちむらざ</sup>の櫓<sup>やぐら</sup>にはまだ足場<sup>あしぢやう</sup>が  
かかつていたけれど、その向側<sup>あやつりにんぎやうざ</sup>の操<sup>あや</sup>人<sup>ひと</sup>形<sup>かたち</sup>座<sup>ざ</sup>は結城座<sup>ゆうきざ</sup>薩摩座<sup>さつまざ</sup>の二軒<sup>ふたしやう</sup>ともに早やその木  
戸口<sup>こ</sup>に彩色<sup>あたらはちがつ</sup>の絵具<sup>えぐ</sup>さえ生々<sup>きやうきやう</sup>しい看板<sup>かんばん</sup>と当<sup>あた</sup>八月<sup>はちがつ</sup>より興業<sup>こうぎやう</sup>する旨<sup>こころじやう</sup>の口<sup>くち</sup>上<sup>じやう</sup>を掲<sup>か</sup>げていた。  
されば表通り軒並<sup>けんなみ</sup>の茶屋<sup>ちや</sup>はいずれも普請<sup>ふしん</sup>を終つて今<sup>いま</sup>が丁度<sup>ていど</sup>移<sup>ひ</sup>転<sup>てん</sup>の最<sup>さい</sup>中<sup>ちゆう</sup>と見える家<sup>うち</sup>も  
あつた。彼方<sup>かなた</sup>此方<sup>こなた</sup>に響<sup>ひび</sup>く鑿<sup>の</sup>金<sup>み</sup>槌<sup>づち</sup>の音<sup>おと</sup>につれて新<sup>あらた</sup>しい材木<sup>ざいぼく</sup>の脂<sup>あぶら</sup>の匂<sup>におい</sup>が鋭<sup>えい</sup>く人<sup>ひと</sup>の鼻<sup>はな</sup>をつく中<sup>なかに</sup>  
をば、引越<sup>ひきこ</sup>の荷車<sup>くるま</sup>は幾<sup>いく</sup>輛<sup>りやう</sup>となく三升<sup>みつす</sup>や橘<sup>たちばな</sup>や銀杏<sup>いんぎよう</sup>の葉<sup>は</sup>などの紋<sup>もん</sup>所<sup>どころ</sup>をつけた葛籠<sup>つづら</sup>を  
運<sup>は</sup>んで来る。あちこちと往來<sup>ゆきき</sup>する下<sup>した</sup>廻<sup>まわり</sup>らしい役者<sup>やくざ</sup>の中にはまだ新<sup>あらた</sup>しい御触<sup>おふれ</sup>が出てから  
間<sup>ま</sup>もない事<sup>こと</sup>とて、市中<sup>いちぢゆう</sup>と芝居町<sup>しばいまち</sup>との区別<sup>くべつ</sup>を忘れて、後生<sup>かむ</sup>大事<sup>だいじ</sup>に冠<sup>かむ</sup>つたままの編笠<sup>あみがさ</sup>を取<sup>と</sup>ら  
ず<sup>た</sup>に歩いてゐるものもあつた。それが見馴<sup>みな</sup>れぬ目<sup>め</sup>にはいかにも不思議<sup>ふしぎ</sup>に思<sup>おも</sup>われるのであつ

種員<sup>しゆゐん</sup>はつい去年<sup>こぞ</sup>の今頃<sup>いまごろ</sup>までは待乳山<sup>まちちやま</sup>の樹<sup>き</sup>の茂<sup>さか</sup>りを向<sup>むか</sup>うに見<sup>み</sup>て、崩<sup>くずれ</sup>れかかつた土堀<sup>どぼり</sup>の中<sup>なかに</sup>  
には昼間<sup>きつね</sup>でも狐<sup>きつね</sup>が鳴<sup>な</sup>いてゐるといわれた小出伊勢守<sup>こいでいせのかみさま</sup>様の御下屋敷<sup>おしもやしき</sup>が、瞬<sup>またた</sup>く中に女形<sup>おやま</sup>の振<sup>ふ</sup>

袖なびく綺羅音楽の巷になつたのかと思うと、この辺の土地をばよく知っている身には

全く狐につままれたよりもなお更不思議な思がして、用もないのに小路々々の果までを飽

きずに見歩いた後、やがて浅草隨身門外の裏長屋に呑気な独世帯を張っている笠

亭仙果の家へとやつて来た。

仙果は何処へか慌忙て出て行こうとする出合頭朝帰

りの種員を見るや否や、いきなりその胸倉を取つて、「乃公ア今お前を捜しに行こうと思

つていた処だ。気をたしかにしな。気をたしかにしな。」

「こう仙果さん。どうしたもんだな。お前こそ気でもちがつたんじやねえか。痛え痛え。

まア放してくんな。懷中から大事な書きものがおつこちるぜ。」

「気をたしかにしなせえ。腰でも抜かさぬように用心したがいいぞ。堀田原の師匠がの、

今朝おなくなりになつたのだ。」

啞然としていう処を知らぬ種員に向つて仙果は泣く泣く一伍一什を語り聞かせた。

柳亭種彦先生は昨夜の晩おそく突然北御町奉行所よりお調の筋があるにより今朝五ツ時

までに通油町地本問屋鶴屋喜右衛門同道にて常磐橋の御白洲へ罷出よとの御

達を受けた。それがためか、あらぬか、先生は今朝方御病中の髪を結直しておられる

時突然卒中症に襲われ、

散るものに極<sup>きわま</sup>る秋の柳かな

という辞世の一句も哀れや六十一歳を一期<sup>いちご</sup>として湓<sup>こう</sup>然<sup>ぜん</sup>この世を去られた。

種員<sup>ほおかむ</sup>は頼冠<sup>てぬぐい</sup>りにした手拭のある事さえ打忘れ今は惜<sup>おしげ</sup>気もなく大事な秘密出版の草稿に流るる涙を押拭<sup>もろとも</sup>った。そして仙果<sup>きんりゅうざん</sup>諸共堀田原をさして金竜山の境内を飛ぶがごとくに走り行く。

大正元年初冬稿

## 青空文庫情報

底本：「雨瀟瀟・雪解 他七篇」岩波文庫、岩波書店

1987（昭和62）年10月16日第1刷発行

1991（平成3）年8月5日第6刷発行

底本の親本：「荷風小説 四」岩波書店

1986（昭和61）年8月8日

初出：「三田文学」

1913（大正2）年1月、3月、4月

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号586）を、大振りにつくっています。

※表題は底本では、「散柳窓夕栄《ちるやなぎまどのゆうばえ》」となっています。

※初出時の表題は「戯作者の死」です。

入力：入江幹夫

校正：酒井裕二

2018年5月27日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 散柳窓夕栄

永井荷風

2020年 7月18日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>